

- 13 岐に臨みて 腸 断へ易し
14 闕を望みて 眼 将に穿んとす
15 落涙、朝露を欺く
16 啼聲 杜鵑を乱す

口語訳

- 9 (太宰府へ放逐されて行く道々での) 牛のひずめの跡のわずかな水たまりさえも私には(大きな) 落とし穴のように思え
- 10 (太宰府へ放逐されて行く) 鳥の飛ぶ道には、(いつも) 鷹やはやぶさが待ち構えているように思えた。
- 11 老僕は、その長い道すがら、いつも杖に助けられ、私につき従った。
- 12 (余りの道程の長さに) 疲れ切った馬を進ませるのに、何度も何度も鞭をあててきた。
- 13 京からの別れ道に立っては、腸がちぎれるほどの筆舌に尽くし難い悲しみを味わって来た。
- 14 遠く京都の宮城をあとにし、(これが見納めになるのでは、と) 目が穿つほど、その情景を凝視したものだ。
- 15 別れに及んで流す涙は、着物に落ちた朝露と見違えばかり。
- 16 (別れに及んで) 泣く声は、(哀切悲愴な泣き声で知られている) 杜鵑のそれをかき乱すほどのものであった。